

環長崎港地域アーバンデザインシステム によるまちづくり

～2020年アジア都市景観賞の受賞報告～



そえ かわ しん いち
添 川 信 一*

1. はじめに

長崎県では、美しい都市景観を創造し、後世に引き継ぐ財産とするために、平成12年に「環長崎港アーバンデザインシステム」（以下、「アーバンデザインシステム」）を創設した。

本稿は、20年に亘り取り組んできた同システムが、この度、2020年アジア都市景観賞を受賞したことをご報告させていただくものである。

2. アーバンデザインシステムの概要

アーバンデザインシステムは、長崎港周辺で様々な開発事業を行なうにあたり、専門家からデザインについての助言を頂きつつ、個別の事業間の総合的なデザイン調整を行うことにより、質の高い都市景観を形成するシステムである。

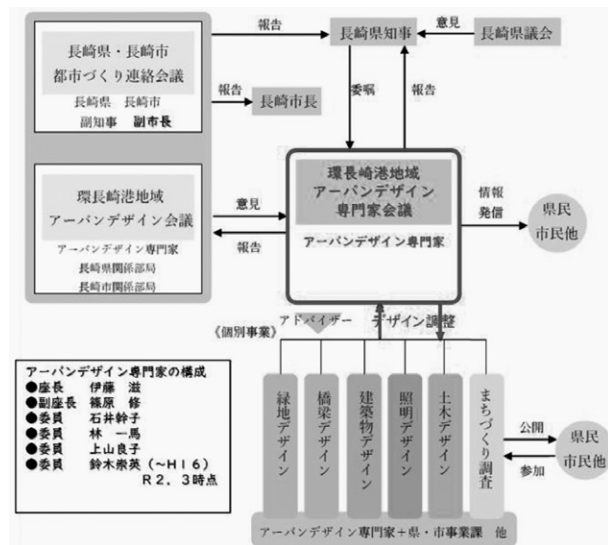


図-1 システムの概要

1) 対象地域

アーバンデザインシステムの対象となる地域は、長崎港の入口を東西に結ぶ女神大橋からJR長崎駅や長崎県庁などが立地する港奥部までを含む長崎港とその周辺部一体の地域である。

長崎港は、県内離島との定期航路や外国クルーズ船が寄港する「海の玄関口」となっており、今年、1571年にポルトガル船が入港して以来、開港450周年という節目の年を迎えた。

(1) 長崎港の光と影

長崎港は、江戸時代には西洋や中国へ開かれた日本唯一の港として、また、幕末から明治期の居留地時代を経て、大正期には上海航路が開設されるなど華やかな海外交流の歴史を紡いできた。

しかし、第二次大戦が始まると、居留地時代に大浦バンドと呼ばれ領事館や商社が並んでいた大浦地区には軍事機密を守るための目隠し倉庫が建てられ、また、戦後も貨物倉庫群が建ち並ぶ地区として高度経済成長を支えてきたが、県民や観光客が近寄り難い場所となっていた。



写真-1 昭和終わり頃の長崎港常盤地区

*長崎県 土木部 都市政策課 景観まちづくり班 課長補佐

(2) ナガサキ・アーバンルネッサンス2001構想

一方で、県民や観光客が憩える水辺の空間の整備が望まれるようになってきたため、長崎県では、都市の再生を図るべく「ナガサキ・アーバンルネッサンス2001構想」を昭和61年3月に策定した。

その先行プロジェクトとして、長崎港内港地区再開発事業に着手し、平成7年には五島列島や伊王島・高島など県内離島とを結ぶ長崎港ターミナルが完成した。

2) アーバンデザイン専門家会議

アーバンデザインシステムにおいてデザイン調整を行う場として、「アーバンデザイン専門家会議」を設置している。座長が担当する専門家を割り当て、担当となった専門家が本県の事業課に具体的なアドバイスをを行い、本会議において議論を交わし、必要に応じてフィードバックさせるという仕組みである。

「デザインマニュアルでは真に魅力的なものはつくれない」との専門家の意見から、統一コンセプトは設定しているものの、具体のマニュアルが整備されておらず、各専門家が有する高度な専門知識と豊富な実戦経験によるところが大きい。このため、事業課としては、設計の見直しが発生したり、同会議での専門家の意見によっては難しい調整を求められることもある。これは、地元長崎市や民間による対象事業についても同様な対応を求めてきた。

長崎港周辺において、景観と調和した質の高いデザイン性と親水性を持った建造物群により、一連の地域形成がなされていったことは、各事業担当者の弛みない努力、柔軟な対応があってこそその成果でもある。



写真-2 アーバンデザイン専門家会議の様子

3. アーバンデザインシステムの実績

平成12年の制度創設より様々な施設のデザイン調整を行ってきたが、その成果をいくつかご紹介させていただく。

1) 長崎水辺の森公園

「土地の記憶」を継承する大地の舞台をデザインコンセプトとし、水路によって縁取られた3つのエリアを、それぞれの特色を活かしたランドスケープとなるようなデザインがなされている。

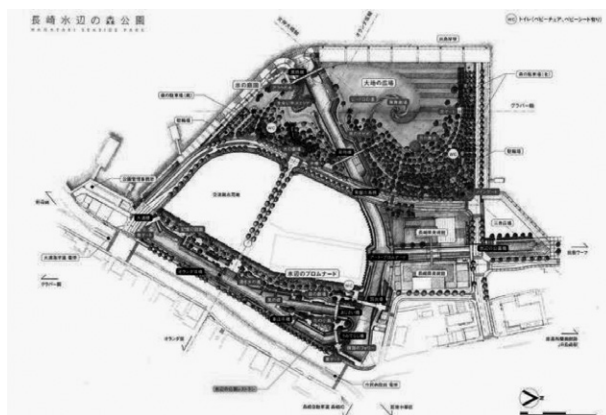


図-2 長崎水辺の森公園平面図

園内に施された噴水やせせらぎには、近くを走るながさき出島道路のトンネル湧水を活用しており、子供たちの人気スポットとなっている。

また、水路には野鳥が飛来しやすいように潮溜まりを設け、生物多様性にも配慮している。



写真-3 せせらぎで楽しむ親子

2) 長崎県美術館

隣接する長崎水辺の森公園等とのデザイン的な連続性に配慮しつつ、敷地を二分する水路を活かした建築デザインを施している。



写真-4 水路沿いの自然と繋がりを重視したデザイン

3) 松が枝国際観光船埠頭

ターミナルを緑地と一体化した「ハレ」と「ケ」の共存する緑の空間として整備した。背後には、「明治日本の産業革命遺産」(世界遺産)の構成資産である「旧グラバー住宅」があり、庭園からの眺望を確保するため、建築高さを7mと低く抑えたデザインとなっている。



写真-5 松が枝国際観光船埠頭

4) 長崎県庁舎とおのうえの丘

県庁舎等の移転新築と防災緑地が一体となり、建物内部と屋外を、県民が自由に交流できるオープンスペースとしてデザインした。



写真-6 移転した県庁舎とおのうえの丘

4. アジア都市景観賞

アジア都市景観賞は、アジアの人々にとって幸せな生活環境を築いていくことを目標とし、他都市の規範となる優れた成果を上げた都市、地域、大きなプロジェクト等を表彰するものである。

今回、「20年に亘るアーバンデザインシステムにおけるデザイン調整により、周辺景観と調和した質の高いデザイン性と親水性を持った建造物群が出現し、一連の地域形成が進み、県民や観光客が港の風景を楽しみ、賑わう場となった。」「専門家同士が意見交換・評価を行うデザインシステムは、先導的な取組みとして、他都市の規範となりえる。」との高い評価をいただいた。

5. おわりに

「環長崎港地域アーバンデザインシステム」は、「歴史と風土が透けて見える未来の“みなとまち長崎”の主張」と統一コンセプトとして、未来の港町をイメージしながらデザイン調整を行い、長崎港周辺の都市景観形成に大きな役割を果たしてきた。

今後も、長崎港松が枝岸壁の2バース化事業や、移転した県庁の跡地活用など、県民や観光客が港の風景を楽しみ、賑わいの場のデザイン調整を図っていく必要がある。

これまでの歴史を踏まえつつ、未来のみなとまち長崎に相応しい新たな都市デザインを実現させるべく取り組んでいく所存である。

【著者紹介】 添川 信一 (そえかわ しんいち)

平成6年長崎県入庁(土木職)。都市計画、都市再生、景観、道路、都市公園、下水道等の職務に従事。企画振興部まちづくり推進室主任技師、対馬振興局上県土木出張所係長、長崎振興局都市計画課係長を経て現職。